

「道徳教育」の可能性

－2015年学習指導要領解説改訂に関する一考察－

河 野 一 典

The Possibility of “Moral Education”:
A Consideration on the Revision of the Commentary to the
Japanese Government Curriculum Guidelines in 2015

Kazunori Kono

2018年度から小学校で、2019年度からは中学校でも「道徳の時間」が「特別な教科 道徳」へと教科化されて実施することを受けて、その学習指導要領解説が2015年に改訂された。まずそこに見られる「特別な教科 道徳」の目標と内容について概観する。そしていわば人間教育の父であるソクラテスの思想を手掛かりに、道徳教育の本質（誰がどのような仕方では何を教えらるのか）を踏まえて、今後の道徳教育の進むべき方向（可能性）について提言する。

Key Words: [道徳の教科化] [特別の教科 道徳] [学習指導要領解説] [ソクラテス]

(Received September 11, 2017)

I はじめに

日本における道徳教育は、昭和33（1958）年に教育課程に位置付けられて以来、平成10（1998）年には5度目の改定を重ねてきたが、基本的な考え方は変わっていないとされる。そして平成27（2015）年、中央教育審議会の答申を踏まえ、学校教育法施行規則を改正し、「道徳」を「特別の教科である道徳」とするとともに、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の一部改正の告示を公示した。今回の改正は、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものである¹。すなわち、1958年に告示された学習指導要領において特設され、これまで継承されてきた「道徳の時間」²は、今回の一部改正にともない「特別の教科 道徳」（以下、道徳科と略す）として位置づけられ、「道徳の教科化」が実現するに到った。道徳は2018年度小学校で、翌2019年度からは中学校でも教科化される。したがって道徳科は現在と異なり、国定教科書と

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

評価制度³が導入される。

拙論では、今回の道德の教科化にともなう改定点を概観するとともに、道德科の目標とされる「よりよく生きるための基盤となる道德性を養う」の「道德性」とは何かを問い、それを誰がどのように教えられるのかという現場の教員が素朴に感じている道德教育の根本的な問題をプラトン『ソクラテスの弁明』を手掛かりに考えていく。

Ⅱ 「道德科」改定の要点

(1) 道德科の目標

道德科の学習指導要領が従来の「道德の時間」から改定された点を概観しよう。まず教科の目標について次のように言われている。

道德的価値について自分との関わりも含めて理解し、それに基づいて内省し、多面的・多角的に考え、判断する能力、道德的心情、道德的行為を行うための意欲や態度を育てるという趣旨を明確化するため、従前の「道德的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め」ることを、学習活動を具体化して「道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習」と改めた。さらに、これらを通じて、よりよく生きていくための資質・能力を培うという趣旨を明確化するため、従前の「道德的実践力を育成する」ことを、具体的に「道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と改めた⁴。（下線は筆者による。）

明確化と具体化という言葉が示すように、一方で教科化にあたり教育現場の困惑を解決するための方策として、明確な教材と到達目標を具体的に示すことが求められる⁵。しかし他方では、具体化すればするほど特定の道德性（価値観）が押し付けられるのではないかという疑念が生じることも尤もである。というのは戦前の日本の教育勅語に基づく修身科の道德教育が進められたことが悲惨な戦争を助長する一因となったことは否めない反省であろう。したがってその批判に対しては「考え、議論する道德」の授業、「道德的価値について自分との関わりも含めて理解し、それに基づいて内省し、多面的・多角的に考え、判断する能力、道德的心情、道德的行為を行うための意欲や態度を育てる」ことが目標であると明確に答えられ、念押しされている⁶。

道德科の授業では、特定の価値観を生徒に押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることは、道德教育の目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道德的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道德教育が求めるものである⁷。

具体的な道德科の目標には以下の項目が示される。

- 1 道徳教育の目標⁸に基づいて行う
- 2 道徳的諸価値⁹についての理解を基にする
- 3 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める¹⁰
- 4 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度¹¹を育てる

それではこのように「考える道徳」を打ち出す一方で、指導要領解説にある道徳科の内容はいかなるものであろうか。平成29年3月、一足早く始まった小学校の教科書の検定では、パン屋が和菓子店、アスレチック公園が和楽器店、消防団員のおじさんがおじいさんに変更された。それらは道徳科の指導要領の内容としてふさわしいものに変更されたとしているが、いかなる意味があるのだろうか。

(2) 道徳科の内容

道徳の内容項目のまとまりを示す4つの視点は従来の「道徳の時間」と変わらないが、その順序が変更された。

- A 主として自分自身に関すること
- B 主として人との関わりに関すること
- C 主として集団や社会との関わりに関すること
- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

これら4つの視点のもとに、さらに細分化され22項目が示されている。ここでは具体的な説明は割愛するが、それぞれの視点に提示されている項目を中学校学習指導要領解説にしたがって列挙しよう。

A 自己の在り方を自分自身との関わりで捉え、望ましい自己の形成を図る。

(1)自主、自立、自由と責任 (2)節度、節制 (3)向上心、個性の伸長 (4)希望と勇気、克己と強い意志 (5)真理の探究、創造

B 自己を人との関わりにおいて捉え、望ましい人間関係の構築を図る。

(6)思いやり、感謝 (7)礼儀 (8)友情、信頼 (9)相互理解、寛容

C 自己を様々な社会集団や郷土、国家、国際社会との関わりにおいて捉え、国際社会と向き合うことが求められている我が国に生きる日本人としての自覚に立ち、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な道徳性を養う。

(10)遵法精神、公德心 (11)公正、公平、社会正義 (12)社会参画、公共の精神 (13)勤労 (14)家族愛、家族生活の充実 (15)よりよい学校生活、集団生活の充実 (16)郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度 (17)我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度 (18)国際理解、国際貢献

D 自己を生命や自然、美しいもの、気高いもの、崇高なものとの関わりにおいて捉え、人間としての自覚を深める。

(19)生命の尊さ (20)自然愛護 (21)感動、畏敬の念 (22)よりよく生きる喜び

Ⅲ 道德教育の本質

以上、このたび改定された道德科の目標と内容を概観した。そこに見られる高潔な徳操の数々は、個人的にも社会的にも豊かな人生を送るために必要なものであり、それについて拙論は異議を唱えるものではない。それどころか道德教育を強化することにやぶさかではなく、その意義や豊かな可能性について探求するものである。しかしながら本章では、そもそも「道德性」(人間としてよりよく生きようとする人格的特性)とは何かを問い、それを誰がどのように教えられるのかという道德教育の根本的な問題を、プラトン(BC. 428～347)がその著作『ソクラテスの弁明』においてソクラテス(BC. 469～399)に語らせている原点に回帰して論じよう。

(1) 誰がどのように徳を教えられるか

もし自分の息子が仔馬や仔牛であるならば、善さ(ἀρετή)をもつ牛馬にしてもらうためには、馬事や農事に知識のある者に頼まなければならない。さもなければ牛馬は台無しにされるであろう。そのことに喩えて人間を徳(ἀρετή)ある立派なものにするためには、徳について知識のある者を監督者として採らなければならない旨をソクラテスは説いている。

しかし現実には、君の息子2人は人間なのだから、どういう者を、彼らの監督者として採るつもりで、君はいるのかね。人間として、また国家社会の一員として持つべき徳を知っている者があるだろうか。……もしわたしが、そういう知識をもっているのだとしたら、自分でも、それを栄えあることとして、さぞ得意になったことだろう。しかしまちがわないでください。わたしはそういう知識を、もってはいないのです、アテナイ人諸君¹²。

ここで「善さ」あるいは「徳」と訳したἀρετήは、もともと「善さ・卓越性」を意味する言葉で、人間のみならず動物やひいては身体的な器官にも適用される。したがって馬のἀρετήは速く走ったり、力が強いことである。それでは人間についてはどうか。善い・立派な人間がもつべき徳とは何であろうか。周知のごとく、ソクラテスはアポロンの神託を通じてアテナイでもっとも知恵のある者とされた。しかし自分を知者と思わないソクラテスは善美に関する知を求めて、世間で知者と評判の人々(ソフィスト、政治家、職人等々)と問答を重ねた。

ソクラテスは神託の意味を次のように解釈した。善美について、「自分は何も知らない」ということをソクラテスは自覚している。他方知者を自認する人々は「実際には知らないのに知っていると思っている」。この無知の自覚の有無において、ソクラテスの方が他の無自覚な人々に比べて優れている。いわゆる「無知の知」の思想である。

私は知恵があると思われる者の一人を訪ねてみる事にしました。……仔細にその人物―特に名前をあげて言う必要もないでしょう。それは政界の人だったのですが―その人を相手に問答しながら観察しているうちに、次のような経験をしたのです。(中略)つまりこの人は、多くの人に知恵のある人と思われるらしく、また自分でもそう思い込んでいるようだけれども、実はそうでもないのだと、私には思われるようになったのです。それで、

私は彼にそうではないという事を説明しようと努めたのです。その結果私は彼にもまたその場にいた多くの人々にも憎まれる事になったのです。しかし私は、一人になって考えたのです。彼より私のほうが知恵がある。なぜなら二人とも美や善についてよく知らないと思われるが、彼は知らないのに知っていると思っているが、私は知らないのです、そのとおり知らないと思っている。その点で私のほうが少し彼より知恵が優れていると思う。また私は彼以上に知恵があると思われている者を訪ねたが、やはり同じ結果となったのです。そして私はその者からもまたその他の多くの人々からも憎まれることになったのです。……私には、最も名声ある人々がほとんどすべて最も思慮を欠き、尊敬されることが少ない人々のほうが謙虚であるという点で、より立派な人々と思えたのです¹³。

ソクラテス是对話を通じて相手の持つ考え方に疑問を投げかける問答法（διαλεκτική）により哲学を展開する。その方法は、自分ではなく相手が知識を産み出すことを助けるということで、「産婆術」と呼ばれている。ソクラテスの用いた問答法は、相手の矛盾や行き詰まりを自覚させて、相手自身で真理を発見させたり、探求の出発点に立たせたりすることを目的としている。

(2) 徳とは何か

人としての善さ・徳と言え、われわれは「道徳」あるいは「倫理」と言う言葉と同義的に、内面的な人格・人間性を思い描くかもしれない。しかし注意しなければならないのは、それぞれ自分が属している時代の趨勢や社会情勢ひいては特定の集団の変化に応じて、自分が思う徳の内容も変わるということである。戦時中であれば勇ましく頑丈であることが善いことであろう。特定の国では神への信仰心に厚いことが大切であるかもしれないし、金銭的富や社会的な栄達が持ち上げられる社会もあるだろう。このように社会通念が、意識するしないにかかわらず、われわれが正しいと思っている道徳性にも不可避免的に影響を与えているのである。

ソクラテスが生きた当時のアテナイという繁栄した都市国家においては、社会通念上、徳は富や栄達（立身出世）、家柄等の政治的権力に結びつくものであり、金銭と引き換えにその術を教えるソフィストが台頭していた。ソクラテスはそのような国家に警鐘を鳴らし、自覚的かつ普遍的な仕方（問答法）で徳（普遍的な善）の探求に着手した。徳の在り方（価値観）をいわば180度転換し明言している点で、彼の名はいわば哲学者の代表のように語り継がれている。

世にも優れた人よ、君はアテナイという知力においても武力においても最も評判の高い偉大なポリスの一員でありながら、ただ金銭をできるだけ多く自分のものにしたいというようなことに配慮して恥ずかしくないのか。評判や地位のことは気にしても、知恵と真理には気を遣わず、魂をできるだけすぐれた善いものにするように配慮も関心もないのは（恥ずかしくないのか）¹⁴。

ソクラテスの最大の関心事は人間教育（παιδεύειν ἄνθρώπους）であり、その教育目的は徳すなわち魂（ψυχή）の善さによる幸福の追求であった。幸福は生きる目的であり、善く生

きることである。善についてわれわれは普遍的に知ることが可能であり、その知識がわれわれを善い行為へと導き幸福になれるのである。いわゆる「知徳合一」、「知行合一」、「福德一致」と言われる思想である。

私が歩き回って行っていることといえば次のことである。すなわち諸君のうちの年下の者も年長の者も、魂が出来るだけすぐれた善いものになるよう、ずいぶん気をつかわなければならぬのであって、それよりも先に、もしくは同程度にでも、身体や金銭のことを気にしてはならないと私は説くのです。金銭をいくら積んでも、そこから魂の善さ(徳)が生まれてくるわけではなく、金銭その他のものが、人間のために善いものとなるのは、公私いずれにおいても、すべては魂の善さによると私は言うのである¹⁵。

魂を善くするためには、魂の善さ(徳・卓越性)は何か、魂の目的と機能を探求し知識とすることが不可欠であろう。なぜなら歴史的に言えば、魂は生命(生きること)の根源とされ、自発的に動き行為し、ひいては自由な意志をもって幸福(善く生きること)を追求する主体としての機能を担っているからである。魂論は歴史的に学問の対象として俎上に載せられ、現代の心理学もまたその延長線上で科学的に分化・発展を遂げている。

IV 結び

このたび「道徳の時間」から「特別な教科 道徳」への教科化－道徳教育の位置づけがいわば格上げされたこと－に関しては、その改革の背景に教育現場における深刻ないじめ問題があったことは確かである。生徒たちに人間の内面的成長となる主体的に考える知的営みを促し、いじめ問題等々の現代社会にはびこる問題を主体的に解決しようとする意欲や社会の一員としての規範意識をもたせるための具体的な施策を工夫することが道徳科に求められているのかもしれない。知徳合一に見られるソクラテスの愛知(φιλοσοφείν)の精神－普遍的な善の探求－が、このたびの道徳の教科化の意図に適合するかどうかはさておき、教科化という重い課題に関して言うならば、教科には歴史的知識の体系すなわち伝統的な学問的基礎づけがあることによって課程(カリキュラム)の安定化が図られると考える。現代社会の問題もまた歴史的過去の遺産・延長線上にあり、歴史的に定位しなければ浮世のその場しのぎの対応に陥る危険性があるからである。実際、Ⅱ章で見た道徳科の内容を概観すれば、「正義」「友情」「生きる喜び」といった古典的な哲学のテーマが散見される。他方、「郷土愛」「国際理解」といった現代社会に求められる新たな実践的な知識－主に人間関係や国家の一員としての自覚－の探究が特筆されている。実践的知識の体系化・学問的基礎づけはアリストテレス(BC. 384-322)の『ニコマコス倫理学』等の成立を俟たねばならないが、そこではソクラテス的な知性的徳とともに、社会生活(人間関係)を善く生きるための性格的徳を区別して論じていることを補足する。

最後に、今後道徳教育を担う教師の姿勢に関して言うならば、特定の集団や時代に都合の良い思想信条の押し付けにならないために、ソクラテスの「無知の知」の精神で、児童・生徒とともに謙虚に(φρονίμως)真理の探究の出発点に立つことが求められるであろう。

- 1 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/ 本論の引用は、中学校学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」(2015)による。同書p. 2。
- 2 小中学校では現在、「道徳の時間」が週に1時間設けられているが、個別の教科ではなく、教科外活動である。教材は検定を受けない副読本や教員が独自に作った資料などが用いられ、成績評価は省かれている。小中学校の「道徳の時間」は1958年にスタートして以来、この位置づけは変わらなかった。
- 3 教科となる道徳では、検定教科書は作られるが、道徳専門の教員免許は設けず、指導はこれまでと同様に原則、学級担任がすることになる。また、学習の理解度や達成度を数値で示さず評価は文章で表す。このような理由で「特別の教科」と呼ばれる。
- 4 前掲書p. 4。
- 5 文部科学省は「道徳教育アーカイブ」専用サイトを設けて、
<https://doutoku.mext.go.jp/>
- 6 前掲書p. 4～13。
- 7 前掲書p. 13。
- 8 道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする。前掲書p. 14。
- 9 よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものである。生徒が将来、様々な問題場面に出会った際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的实践を行うためには、道徳的価値の意義及びその大切さの理解が必要になるとされる。前掲書p. 14。
- 10 次項の道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てるため、ここでは、学習を進めていく上で留意すべき諸側面を明示している。
- 11 道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度は道徳性を構成する諸様相である。道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格の特性であり、これらの道徳性の諸様相は、それぞれが独立した特性ではなく、相互に深く関連しながら全体を構成している。前掲書p. 17。

- 12 『ソクラテスの弁明 (ΑΠΟΛΟΓΙΑ ΣΩΚΡΑΤΟΥΣ)』校訂は Platonis Opera, Tomvs I (Oxford Classical Texts) による。訳文は基本的に田中美知太郎訳に從う。20a～c. νῦν δ' ἐπειδὴ ἀνθρώπῳ ἐστόν, τίνα αὐτοῖν ἐν νῶ ἔχεις ἐπιστάτην λαβεῖν; τίς τῆς τοιαύτης ἀρετῆς, τῆς ἀνθρωπίνης τε καὶ πολιτικῆς ἐπιστήμων ἐστίν; οἶμαι γὰρ σε ἐσκέφθαι διὰ τὴν τῶν ὑέων κτῆσιν. ...ἐγὼ γοῦν καὶ αὐτὸς ἐκαλλυνόμην τε καὶ ἡβρυνόμην ἅν ἐι ἡπιστάμην ταῦτα· ἀλλ' οὐ γὰρ ἐπίσταμαι, ὧ ἄνδρες Ἀθηναῖοι.
- 13 *Ibid.* 21c～d, 22a. ἦλθον ἐπὶ τίνα τῶν δοκούντων σοφῶν εἶναι,διασκοπῶν οὖν τοῦτον— ὀνόματι γὰρ οὐδὲν δέομαι λέγειν, ἣν δέ τις τῶν πολιτικῶν πρὸς ὃν ἐγὼ σκοπῶν τοιοῦτόν τι ἔπαθον, — καὶ διαλεγόμενος αὐτῷ, ἔδοξέ μοι οὗτος ὁ ἀνὴρ δοκεῖν μὲν εἶναι σοφὸς ἅλλοις τε πολλοῖς ἀνθρώποις καὶ μάλιστα ἑαυτῷ, εἶναι δ' οὐ· κἄπειτα ἐπειρώμην αὐτῷ δεικνύναι ὅτι οἶοιτο μὲν εἶναι σοφός, εἴη δ' οὐ. ἐντεῦθεν οὖν τούτῳ τε ἀπηχθόμην καὶ πολλοῖς τῶν παρόντων· πρὸς ἑμαυτὸν δ' οὖν ἀπιὼν ἐλογιζόμην ὅτι τούτου μὲν τοῦ ἀνθρώπου ἐγὼ σοφώτερός εἰμι· κινδυνεύει μὲν γὰρ ἡμῶν οὐδέτερος οὐδὲν καλὸν κάγαθόν εἰδέναι, ἀλλ' οὗτος μὲν οἶεται τι εἰδέναι οὐκ εἰδώς, ἐγὼ δέ ὥσπερ οὖν οὐκ οἶδα, οὐδὲ οἶομαι· ἔοικα γοῦν τούτου γε σμικρῷ τινι αὐτῷ τούτῳ σοφώτερος εἶναι, ὅτι ἃ μὴ οἶδα οὐδὲ οἶομαι εἰδέναι. ἐντεῦθεν ἐπ' ἄλλον ἦα τῶν ἐκείνου δοκούντων σοφωτέρων εἶναι, καὶ μοι ταῦτά ταῦτα ἔδοξε· καὶ ἐνταῦθα κάκειν' καὶ ἅλλοις πολλοῖς ἀπηχθόμην. οἱ μὲν μάλιστα εὐδοκιμοῦντες ἔδοξάν μοι ὀλίγου δεῖν τοῦ πλείστου ἐνδεεῖς εἶναι ζητοῦντι κατὰ τὸν θεὸν ἅλλοι δὲ δοκοῦντες φαυλότεροι ἐπεικέστεροι εἶναι ἄνδρες πρὸς τὸ φρονίμως ἔχειν.
- 14 *Ibid.* 29d. ‘ὦ ἄλιστα ἀνδρῶν, Ἀθηναῖος ὢν, πόλεως τῆς μεγίστης καὶ εὐδοκιμωτάτης εἰς σοφίαν καὶ ἰσχύν, χρημάτων μὲν οὐκ αἰσχύνη ἐπιμελούμενος ὅπως σοι ἔσται ὡς πλεῖστα, καὶ δόξης καὶ τιμῆς, φρονήσεως δὲ καὶ ἀληθείας καὶ τῆς ψυχῆς ὅπως ὡς βελτίστη ἔσται οὐκ ἐπιμελῇ οὐδὲ φροντίζεις;’
- 15 *Ibid.* 30a～b. οὐδὲν γὰρ ἄλλο πράττων ἐγὼ περιέρχομαι ἢ πείθων ὑμῶν καὶ νεωτέρους καὶ πρεσβυτέρους μῆτε σωμάτων ἐπιμελεῖσθαι μῆτε χρημάτων πρότερον μηδὲ οὕτω σφόδρα ὥς τῆς ψυχῆς ὅπως ὡς ἀρίστη ἔσται, λέγων ὅτι ‘Οὐκ ἐκ χρημάτων ἀρετὴ γίγνεται, ἀλλ' ἐξ ἀρετῆς χρήματα καὶ τὰ ἄλλα ἀγαθὰ τοῖς ἀνθρώποις ἅπαντα καὶ ἰδία καὶ δημοσία.’